

吉崎の嫁おどし（肉附面）の伝承： 蓮如伝説の一断面

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/23733

吉崎の嫁おどし（肉附面）の伝承

——蓮如伝説の一断面——

藤 島 秀 隆

はじめに

長享二年（一四八八）六月、加賀の一向一揆が蜂起して守護富樫政親を攻め滅ぼして以来、昭和六十三年（一九八八）は五百年に当る。石川県内においては、一向一揆関係の資（史）料展の開催など各種のイベントが実施されたのである。私どもが所属する加能民俗の会では、その行事の一環として『蓮如さん！門徒が語る蓮如伝承集成』（A5判三一八ページ）を刊行したが、百四十七話収録されている。一読すると蓮如上人（浄土真宗本願寺第八代法主）をめぐるさまざまな伝承が脈々として継承され生き続けてきたことを知る。その背景と風土を探ると、現今、北陸地方が真宗王国といわれている実態と極めて密接な関わりが存するのである。例えば、昭和六十年『石川県統計書』によると、県下の宗教法人になっている総寺院数は一、四三三か寺であり、そのうち浄土真宗は九六八か寺（全体の約七〇％）である。因みに真宗の内訳は本願寺派一〇一、大谷派八六四か寺である。

往昔、蓮如が比叡山衆徒（山門の悪僧たち）の弾圧にもめげず近江から北陸地方へと遊化して、新たに布教活動の拠点と定めた越前国坂井郡吉崎の地に坊舎を建立したのは文明三年（一四七一）七月

であり、四年後の文明七年（一四七五）八月には吉崎を退去している。以後、現在に至るまで地元の門徒衆による蓮如への尊崇並びに真宗寺院に対する勧進と合力等が、真宗発展に大いに寄与してきたことは論を俟たない。

さて、北陸における蓮如伝承を溯及すると、その根源はおおむね藩政時代に成立した寺院由緒書・寺院縁起・地誌類、更に明治時代以降に公刊された郡誌等に依拠しているのである。現代の蓮如伝承は大別すると、①蓮如讃仰をいっそう増補した伝説、②詳細な物語風寺院縁起が要約化した伝説、の二種に分けることができる。本稿では、紙幅の都合もあるので②の伝承として「吉崎の嫁おどし」（肉附面）を祖上に載せ若干の考察を試みたいと思う。

一 「二十四輩順拝図会」等の伝承

真宗大谷派、河内、専教寺の了貞の著『二十四輩順拝図会』（享和三年（一八一三）刊）巻之二に収録されている「嫁おどし肉附面」の大意は次のとおりである。

越前の国に二の勝という所に与惣治という貧しい百姓があつた。妻とともに日ごろ吉崎御坊へ参つて蓮如上人の教化を受けていた。与惣治に老母があつたが、慳貪邪見な性質で、夫婦が法義を喜ぶの

を怒り、「売僧坊主の偽言にたらされんより耕耘に力を尽くし、この世の貧苦を通るべし」などと夫婦を責めていた。夫婦がさまざまに言いなだめ、信心を勧めたが、老母は全く聞き入れなかった。文明四年（一四七二）二月二十日のことである。与惣治は所用で前日から家にいなかった。妻だけが日暮れ頃いつものように吉崎へ参った。老母は今夜こそ嫁を懲しめ信心を止めさせようと思い、産生神の杜に納めてあつた鬼女の面を奪い取つて、その面を顔に押し当て、半白の髪を頭上にふり乱し、白かたびらを引きかぶつて、嫁の帰る道で待ちかまえていた。「汝蓮如坊が偽りに惑はされ、雑行雑修とて神仏を疎かにし、親の心にそむくをもつて白山権現の命を蒙ふり、ただいまこれまで出でたるぞ。前非を改め御山参りを止まり老母の心に随はずんば、夫婦ともつかみ殺さん」といっておどかせば、気の弱い嫁は怖れて言うとおりになるであろうと、考え待っていた。

亥の刻（午後十時頃）ばかりに与惣治の妻はひとり弥陀の御名を唱えながら帰つて来た。老母は藪の中から「女待て」と声かけ踊り出ようとしたが、着物の裾をいばらに引きかけ、少しひまどつている間に、嫁は恐ろしさのあまりいっさんに逃げ去つた。老母は失敗を大に残念がり、また次の夜こそ驚かさうと思い、面を離そうとしたが離れなかった。両手で力にまかせて引いても動かず、耳鼻もひしひしと肉に付いて生れながらの鬼女のようにになった。浅ましさと身もだえするのに、手足さえ枯木の生えたようになって一歩も動くことができなかった。

嫁は一目散にわが家に走り帰つたが、老母がいないので心配しているところへ与惣治も帰宅し、妻の物がたりに驚いた。これはきつと母は、今夜おまえが一人で帰るのを心配して迎えに出たのであろ

うと、夫婦で急いでさがしに出た。かの竹藪の所に人影があるので近寄つて与惣治が声かけると、応えるその声は老母であるが、姿は鬼女であつた。老母が涙をとどめかねて訳を語るのを聞いて、与惣治は「たとえ海山の罪業といえど懺悔すれば消滅すると聞いている。これより御山（吉崎御坊）へ参詣し、蓮如上人の勧化を聴聞しよう」といえば、老母も一念発起して先非を悔い、両手を合わせ「宗祖聖人、現当の蓮如上人許させたまへ。南無阿弥陀仏」と高声に念仏を唱えると、鬼女の面ははらりと地に落ち、すくんでいた手足も動き始めた。これより三人は直ちに吉崎に参り、蓮如上人に拝謁して、事のよしを申し上げ教化を受けた。これよりかの竹藪のあつた所を嫁おどし谷と名づけ、鬼女の面は今もその所にある。

現今、「肉附面」伝説の文獻は六種類存する。それらを大別すると次の二つの型に分かれる。(一)『二十四輩順拝図会』・『嫁威谷物語』（山科西宗寺刊、刊行年未詳）・『嫁威肉附之面由来』（吉崎の西念寺縁起、著作年未詳）・『越前古跡拾集記』（著者、著作年未詳）等では、夫婦ともに健在で、老母は嫁が吉崎参りの帰り道に待ち伏せして脅かすのである。(二)『嫁威肉附面略縁起』（吉崎の願慶寺の縁起、刊行年未詳）・『淨林寺縁起』（山十楽、著作年未詳）では、夫及び子供が死んで嫁が残り、老母は嫁が吉崎へ行く途中の道で脅かすのである。

『二十四輩順拝図会』（以下「図会」と記す）は「肉附面」の由来に関する文獻の中で、唯一刊行年が明記されており、前篇には「享和三年癸亥春新刻」とある。著者は貞は頭書の部分で八か条の凡例を記しているが、そのうち第七条で「（前略）今先書の載する所を皆集し、国字俗文は加ふるに図画をもつてせるは、童蒙婦女の視

やすからんが為なり。」と述べている。同書収載の「肉附面」伝説の出典は如何なる文献に依拠したのか、それは未詳である。しかし先行書の存在は当然考えられる。関山和夫氏は「吉崎願慶寺の『禰嫁威肉附面縁起』の如きは、慶長十六年（一六一一）に開版されて以来、貞享二年（一六八五）・文化十一年（一八一四）に改刻し、大正・昭和と版を重ねて昭和四十一年には二千二百版に及んでいる。（中略）『嫁威肉附面』の話が歌舞伎化されて上演された記録で古いのは、寛政十一年（一七九九）八月・大阪中ノ芝居の辰岡万作『雪国嫁威谷』である」⁽³⁾と指摘しておられる。従って、『図会』成立以前に既に「肉附面」伝説は人口に膾炙されつつあったと言えるであらう。

さて、『図会』収録の「肉附面」伝説を細部にわたり検討を加えると、幾つかの問題点が認められる。第一は、夫婦とも農民で篤い信心者であり、事件発生の時期を文明四年（一四七二）二月二十日のこととしている。この年月日は何を意味しているのであろう、全く不詳である。この年の正月ごろ、蓮如は門徒たちの吉崎群参を禁止⁽⁴⁾しているのである。第二に、この伝説の背景には真宗（一向一揆）と天台宗・白山信仰諸寺（平泉寺・豊原寺など）との対立が窺えるのである。白山を信心している者は心のよくない者であり、必ず罰を受けるということが前提条件として語られている。老母の口を通して白山権現を登場させ、遂には白山権現の代弁者である老母が真宗の仏罰を蒙り、顔にかぶった鬼の面が取れなくなる。面を取るために塗炭の苦しみを受ける。その結果、女人救済が語られているのである。第三に、蓮如の教化を受けた老母に、蓮如は御文一章を撰述し与えたという。「かならず／＼極楽へまゐりてうつくしきはと

けとはなるべきなり」と記している。第四に、老母に脅かされた嫁は一目散に逃げ去っており、信仰による強固な信念は説かれていない。当然、唱え言葉もない。第五に、結末において「嫁おとし谷」地名由来が語られている。

一方、吉崎の願慶寺蔵「嫁威肉附面略縁起」の粗筋は次のとおりである。越前国十楽村に住む農民の与三次の先祖は、日山城主の日山治部右衛門の家臣吉田源之進である。落城後、十楽村にとどまり百姓となった。与三次の妻は清といい、男の子二人いたが与三次及び二子は病死、その後、妻の清は無常を感じ蓮如上人の勸化を受けた。邪見な心の老母（姑）は嫁の吉崎参りをやめさせようと、祖先伝来の鬼の面をかぶり、白いかたばらを着て往来のものすごい小谷で待ち伏せ脅かした。嫁は「食まば食め喰はば喰へ金剛の他力の信はよもや食むまじ」と口ずさみ、念仏を唱え吉崎へ向かった。失敗した老母は帰宅後、面を取ろうとしたが、面は顔にひつつき痛くて取れない。嫁に告白し、嫁に勧められて「南無阿弥陀仏」と唱えると、面は落ち、手足も自由になった。老母は懺悔し、嫁とともに蓮如上人の勸化を聴聞して門徒となった。その後、肉附面は願慶寺の開基祐念坊に授けられ、以来当寺に所蔵されている。また、小谷は「嫁おとしの谷」と名づけられた。

本話の特徴は、第一に、冒頭、夫と先祖並びに子供のことが語られている。第二に鬼の面が武士の子孫らしく祖先伝来と記していること。第三に嫁の清は信仰によって意志が強く、鬼女姿の老母に出会っても怖れていない。現代の昔話・伝説に必ず語られる「食まば食め……」の唱え言葉が初めて用いられている。第四に、本話の筋書きが、現代の口承文芸に大きな影響を与えているのである。第五

に説教による伝播が顕著である。

二 口承文芸「肉附面」の伝承

蓮如をめぐる寺院の説教話として代表的なものは、吉崎の嫁おとし（肉附面）といっても過言ではない。民俗学者関敏吾氏の『日本昔話大成』では笑話として扱い、その話型（三九八）を次のように挙げている。

- 1 姑が嫁を憎んで鬼の面をかぶっておどすが嫁は恐れない。
- 2 面が姑の顔についていってはなれない。
- 3 嫁が寺に連れていって経を上げるととれる。それから二人は仲よくなる。

その分布は青森県から鹿児島県まで全国二十一県に及んでいる。しかし、未調査、未報告地域が偏っており、特に関東地方は一都六県のうち、茨城県の事例一話のみであり、次いで北陸地方も石川県の事例一話だけである。比較的採集報告の少ない昔話といえよう。

「肉附面」は断じて笑話ではない。とりわけ真宗王国といわれる北陸では、語り手の真摯な態度や語り口、更に篤い信仰等から考究すると、笑話としての要素は皆無である。また愚人譚としての性格も薄弱である。「肉附面」は元来、蓮如上人が越前国吉崎御坊に在住のみぎり、ある村の信心深い嫁が信心嫌いの姑の迫害を排除して行き、後に姑も信者になったという筋書きが基本である。型としては「嫁と姑」なのであるが、吉崎御坊に結びつけて語られており、当地方では蓮如伝説とされているものである。右に掲出した話型は、事件の発端部、すなわち、如何なる理由で姑が嫁を憎むのか、その訳が欠如している。モチーフの第一は「嫁が吉崎の寺に毎晩参詣す

る」ことなのである。語り手は単なる「寺参り」とか「蓮如参り」というような言い方をする場合が多い。右の話型の1・2の内容が展開部であり、3の内容が結末部なのである。

私の手許には、石川県内で採集された「肉附面」の類話が十五例ある。いずれも姑と嫁の対立を浮き彫りにして、嫁は善玉、姑は悪玉として語られている。左に二話の梗概を示す。

○金沢市新保本——ものすごく怖い邪険な姑は寺参りが大嫌いで、嫁はものすごく後生願いで吉崎の蓮如のいる寺へ行く。姑はやめさせようと、何升、何升とを碾けと夜なべ仕事を出す、嫁はさつさと済ませ、寺参りに行く。姑は面憎くなり、鬼の面を買ってかぶり竹藪に隠れ、夜中に寺から戻る嫁を脅かした。嫁は一つもあわてず「金剛の信心に歯が立たん」というと、婆はびつくりした。婆がかぶる面は引ついて取れないので、嫁は婆を連れ吉崎へ行く。蓮如の話聞き、婆が我を折って発心したら面が取れたという。（『金沢の昔話と伝説』）

○羽咋郡富来町——与三次の婆は邪険な人で、嫁が吉崎の蓮如の話を聞きに毎晩行くのを憎たらしく思い、たくさんの仕事を出す。嫁は仕事を済ませ参りに行く。ある夜、婆は昔から伝わっている恐ろしい鬼の面を蔵から出し、白い着物を着て、吉崎へ行く途中の竹林で待ち、吉崎から帰る嫁を脅かした。嫁は「食らわば食らえ金剛の、信心なよもやはぐまい」といった。嫁が家に帰ると婆はおらず探しに行く。婆は竹林のところで面を取ろうとするが取れない。嫁は婆を連れて蓮如のところへ行き、話を聞くと面が落ちた。（『能登富来町昔話集』）

信仰嫌いの姑は信心の篤い嫁が毎夜のように蓮如参りを行なうの

を憎み、立腹して、無理な夜なべ作業をたくさん課して邪魔をする。米や麦を石臼で一升、二升、三升、四升などと碾かす量をふやすという語りが十例で最も多い。真宗が目標とする門徒は農民であり、農村地帯を中心として「肉附面」伝説が伝播されたことを物語っている。近世の寺院縁起では夫あるいは子供のことが記述されているが、現在の口承文芸ではおおむね欠如している。事件発生の具体的な年代も語られていない。嫁が吉崎御坊からの帰り道で姑に脅かされたという語りが九例あり、これは真宗本願寺派西念寺の縁起に基づく伝承である。嫁が吉崎御坊へ行く途中の道で姑に脅かされたという語りが六例あり、これは真宗大谷派願慶寺の縁起に依拠した伝承である。明らかに二つのタイプが伝承されているのである。

次に、語りの内容を小項目で整理すると、老婆（姑）がかぶった鬼の面は、先祖代々の鬼の面が家の蔵にあったとするのが二例、鬼の面を買って来たというのが二例、鬼の面を自分で作ったというのが一例、鬼の面の出所不明とするのが十例である。また、老婆が鬼の面をかぶり白い着物を着て行ったという語りが二例、老婆は竹藪に隠れて待ち伏せしたという筋が十例、更に嫌も持って脅かしたという話が三例となっている。最も顕著な事例は、老婆に脅かされた嫁は信心深く、何も恐れない。それは唱えことばの実践にある。大同小異であるが「呑みたか呑め、嚙みたか嚙め、金剛の信に齒が立たん」と唱えているのが十四例あり、唱えことばの欠如が一例となっている。老婆がかぶった面が取れた理由とその場所は、嫁が老婆を吉崎の寺へ連れて行き、蓮如にお経をあげてもらう、または話を聞くとというのが十三例で圧倒的に多く、嫁が一生懸命に念仏を唱えたら婆のかぶった面が取れたというのが一例、場所不詳が一例とな

っている。前掲の話型3に示した如く、結末部において、嫁と姑の二人が仲よくなったかというところ、その部分の語りはないのである。「今でも吉崎の寺に肉附面はある」と結ぶのが六例となっている。

結びにかえて

「肉附面」伝説はいつい誰がもたらしたのであろうか。という問いに対して、話者の回答は、大別すると、①親から聞いた、②近所の年寄りから聞いた、③近所の寺院で僧侶から聞いた、④自分自身が吉崎へ行って、西念寺あるいは願慶寺の住持から聞き、所蔵されている肉附面も見た、の四種が存するのである。殊に、僧侶の説教が本話の伝承・伝播に大きな影響を与えている。それも報恩講の時に説教僧から聞いたという場合が非常に多い。説教僧に次いで村（町）の古老も重要な伝達者の役割を担っているのである。門徒が語る蓮如伝承のうち、「肉附面」伝説には白山信仰は全く語られていない。更に、御文（御文章）の言葉も説かれていないのである。なお、小論は紙幅の都合で他の寺院縁起等に触れることができなかった。詳細は後日を期したいと思う。

注1 『日本名所風俗図会』18（諸国の巻Ⅲ）昭和五十五年一月
角川書店刊所収による。

2 杉原丈夫氏編『越前若狭の伝説』（昭和四十五年二月 松見文庫刊）による。

3 『説教の歴史的研究』昭和四十八年三月法蔵館刊による。

4 御文（御文章）文明五十二年十二月日の条参照。

5 第八卷笑話一、第十一卷資料篇、角川書店刊による。

（金沢工業大学教授）